

## 新たな段階を迎えた NRDF 活動

北海道大学理学研究科  
加藤 幾 芳

15 年間、1987 年度(昭和 62 年度)から文部省事業費として、国内の荷電粒子核反応データの収集・蓄積と国際核データ交換活動を行ってきましたが、来年度(2002 年度、平成 14 年度)からは競争的資金・科研費に切り替わることになりました。これまでも、NRDF 活動については、毎年、年次報告書を作成し、国内の多くの機関・研究者に配布して、ご批判・ご意見を頂くよう努力してきました。来年度からは、一層厳しい評価のもとで、国内および国際的核データ活動がより発展するように努力していかねばならないものと、心新たにしているところであります。

さて、国内の荷電粒子核データ活動は、1973 年の科研費の特定研究「広域大量情報の高次処理」に始まり、およそ 30 年間、さまざまな紆余曲折はあるものの着実にデータ収集・蓄積さらに利用体制の確立に努めてきました。前半のおよそ 10 年間は、データの種類において極めて大きな多様性を持つ荷電粒子核反応データを確実かつ正確に収集・蓄積するためのデータベース作成にあたり、後半は収集・蓄積されたデータの利用・検索のためのシステムづくりが主要な課題でありました。また、中間の 10 年間は、データの収集体制づくりとその確立に費やされたと言つてよいかと思ひます。

このように、データ収集・蓄積、検索・利用のためのシステムの開発を行いながら、これまでおよそ 75 MB のデータを収集してきました。そこで、これから次の 10 年間、何を目標にしてデータ活動を行っていくかが重要な問題になります。NRDF を取り巻く状況のもとで、IAEA を中心とした国際核データセンター・ネットワーク活動の課題や、電子ジャーナル化が急ピッチに進行してきており、データ収集体制の見直し問題などさまざまな課題が存在しています。それら多くの課題の中で最も重要な問題として取り組もうとしていることは、荷電粒子核反応データの評価データベースの作成です。

この評価データベースの問題は数年前にも取り上げられましたが、成果を残す所までになりませんでした。データの評価を行うための十分な条件が整っていなかったからだと思ひれます。特に、NRDF の利用・検索システムが十分実用的な段階になっていなかったということが問題だったと考えられます。現在、IntelligentPad を用いた利用・検索システムや Web での利用・検索も可能となり、データ評価の問題を取り上げる条件が整ってきたと考えられます。もう一つの条件として、データ評価に関する情報学分野からの心強い協力が得られつつあることです。IntelligentPad を完成させた北大工学研究科の田中譲教授らのグループがデータマイニングなどを用いたデータの有効利用を図るシステムの開発に取り組んでいます。その情報学分野の研究グループとの協力で、新たなデータ評価の方法、さらに評価システムを作成していくことを、我々の次の課題として取り組んで行こうという計画です。

荷電粒子核反応データについての我々の取り組みや活動が、データ収集・蓄積システム NRDF の作成、データ収集・蓄積体制の確立、データの利用・検索システムの作成を経て、次に、データ評価システムの作成に取り組むというのは大変自然な発展ではないかと思ひれます。また、荷電粒子核反応データという特殊な分野におけるデータベースの作成の課題ですが、そこで得られた様々な成果は、分野を超えて他の分野やさらに広く社会でも利用できるのではないかと夢が膨らんできます。